

ソロモンはロンドンから北に車を走らせると、農村部にあるあまり発展していない村に到着した。土がむき出しの道を進み、村はずれの墓地の目の前で車は止まった。

白バラを手にソロモンが車を降りると、まっすぐ中央付近にある昔からの墓が存在する区画へと向かう。十字架型の非常にありふれた墓石にはマリー・ブラウンと風化しかけた文字で刻まれていた。

「久しぶりだね」

バラを手向けながらそうつぶやくと、ひざを折りキリスト教式の祈りをささげる。

「あれからもうどの位経ったんだろうね……。君がくれたハンカチはね、もう使い物にならなくなって捨ててしまったんだ。まあ……。100年も使っていたんだから当たり前なんだけさ」

揺り椅子に座りながら刺しゅうをする晩年のマリーの姿が脳裏に蘇る。

ソロモンが部屋に入るとしわだらけの顔を余計にしわだらけにしながら笑顔になる。

『ソロモン見て。あなたの名前を刺しゅうしてみたの』

ソロモンは首元に手を入れるといつも首にかけているペンダントを取り出しカバー部分を開いた。ペンダントの中には若かりし日のマリーの髪の毛が納められた。

「このペンダント覚えている？いつも一緒にいれる物が欲しいって言って、二人で宝石店行って注文したやつ。マリーの分は棺の中だけど、俺の分はまだここにあるんだよ？」

俺ね、最近また弟子ができたんだ。

その弟子だって、俺がマリーの髪の毛といつも一緒にいるのは知らないんだよ。

まあ、教えるようなことでもないんだけどね。

マリーが死んでからね、写真っていうものができたんだよ。

うちの弟子はいつも魔界の写真を見ながら早くこの悪魔たちを召喚するんだ。って言っているよ」
そこまで言うと、ソロモンは深くため息をついた。

一瞬よぎった「マリーも召喚できればいいのに」という言葉が影を落としたのだった。

(交霊術でもやればいいのか？)

わき上がった発想を振り払うようにソロモンは頭を横に振った。

交霊術なんてしても霊媒師に下りてくる霊魂は人間の名前を偽った悪霊なのが大半ということを思い出したからだ。
ソロモンは空を見上げると今から200年ほど前のマリーとの日々を思い出した……。

※※※※※※※※※※

マリーとソロモンの出会いは当時ソロモンのスポンサーとなっていた貴族の地方にある別荘だった。半ばソロモンの自宅となっていたその別荘には、ソロモンを世話するために何人かの家政婦が雇われていた。マリーはその家政婦の一人だった。

「ソロモン様、お食事をお持ちしました」